

調査報告書第三十一集『史料で読む江戸の園芸文化』目次

図版			
刊行にあたって	1		
目次	3		
凡例	5		
序 章 外国人の見た花の都 江戸	7		
第一節 プラントハンターの驚き			
第二節 外国人の見た江戸の景色			
第一章 田園に造られた都市	19		
第一節 造られる観光地			
第二節 武家の庭園			
第三節 庶民の造った花名所			
第二章 花開く江戸の園芸文化	49		
第一節 四季折々の楽しみ			
第二節 武士の園芸			
第三節 奇品園芸の世界			
第三章 園芸流行の立役者と文化の爛熟	123		
第一節 植木屋の活躍			
第二節 植木鉢の普及と植物の商品化			
第三節 奇品の流行と大衆化			
第四節 菊細工の流行			
第五節 出版メディアの役割			
終 章 明治維新と園芸文化	179		
第一節 旧武家地のたどる道			
第二節 花名所の変化と盛衰			
第三節 海外との交流と園芸文化の輸出入			
参考文献目録	226 (17)		
掲載史料目録	242 (1)		

凡例

一、史料は当館が所蔵するものは、なるべく館蔵史料を掲載しているが、近年、他館の運営されているホームページでのデジタル画像の公開により、原文閲覧が可能なものが多くなった。そのため、史料の閲覧の便が良いものについては、当館のものを採用しなかった。今回引用させていただいた他館所蔵のデジタル史料については、巻末の掲載史料目録で引用元を確認できる。

一、各史料には、通し番号、内容をあらわす表題、出典を表示した。出典表記は簡略化したので、詳細は巻末の掲載史料目録で確認されたい。年号には（ ）で西暦を付した。史料と直接に関連する図版がある場合については（図版○）と記し、関連が深い図版については「関連図版○」と付した。

一、各章の冒頭にその章の概要を記した。

一、翻刻にあたり、原文書、もしくは引用元の様式を尊重するようにつとめたが、編集の都合により、原文書の形態を損なわない程度に、次のようにした。

1 活字化された書籍・史料集からの引用は、引用元の編集方針を尊重するように配慮したが、各引用元の凡例が掲載できないため、読者に混乱を与える部分は編集を加えた。

2 字体は原則として、常用漢字に指定されているものは常用漢字を用い、それ以外のものであればできるだけ正字を用いた。異体字・俗字・略字・合字については、次のもの以外は常用漢字・正字を用いた。ただし、慣用的に使用されていない正字もあるため、この制限をゆるめた場合もある。固有名詞については原文のまま表記した。

扣（控） 𢇛（迄） 𢇛（躰） 糸（絲） 并・并（並） 帀（紙） 坐（座） 𠂔（より）

3 変体仮名は平仮名に改めたが、次の文字は使用した。

江（え） ニ（に） 而（て） 而已（のみ）

4 明らかに宛字・誤字と思われるものは、右傍に正字を（ ）で示し、疑念の残る場合は（カ）とした。脱字と思われるものは、右傍に（脱）（脱カ）、で示し、重複文字は（衍）（衍カ）で示した。文字の意味がわからないものについては（ママ）とした。

5 くり返し記号は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」を用いた。「くく」は原文のまま用いた。

6 ルビは史料のまま記した。

7 本文中の補記や加除訂正は、原形を活かすようにつとめ、当該箇所は訂正あるいは削除された文字に見せ消「こ」を付した。

- 8 虫損・破損などで判読不明の文字は□□（字数分）、□□□□（字数不明）で示し、（虫損）（破損）と右傍に記した。文字が推定できる場合は、右に（ ）または（カ）で注記した。
 - 9 人名・語句で説明が必要なものは＊を右肩に付し、補記した。
 - 10 朱書・貼紙は右傍に（朱書）（貼紙）と記した。範囲は「 」で示した。
 - 11 文字数にかかわらず、闕字・平出は一字明けし、（闕字）（平出）と右傍に記した。
 - 12 押印はその形状により㊟・㊞で表現した。印の文字が判読できるものは（ ）で右傍に補記した。
 - 13 割注は原史料になるべく合わせて表記したが、割注が長い史料に関しては、読みやすさを優先して「 」で括った。
- 一、この報告書を作成するにあたり、参考にさせていただいた文献については、巻末に参考文献目録を掲載した。
- 一、史料の一部には、現代において差別的と思われる表現も含まれている。もとより当館はこのような表現を容認するものではないが、原史料が成立した社会背景などに鑑み、原文のままとした。